

瓦谷山



瓦谷山だより



vol.16

発行日 2011年3月吉日
発行人 (宗) 真光寺
岡本和幸
印刷 現代社
編集 (宗) 真光寺

問い合わせ先
(宗) 真光寺
TEL 0438-75-7414

○お寺HP
<http://www.shinko-ji.jp/>
○上総自然学校HP
<http://www.shinko-ji.jp/satoyama/>
○お寺ブログ【瓦谷山だより】
<http://sinkoji.cocolog-nifty.com/news/>

ごあいさつ

年が改まり、うさぎ年となりました。うさぎは跳ねるといって、景気が良くなるという予想もあるようです。私は年男ですので何か良いことがあればいいなと楽しみにしています。お寺の年末年始はお盆に次いで忙しい時期です。暮れは大掃除から始まり、お札作りなど、お正月を迎える準備が目白押しで、真光寺では境内の竹林から伐り出した青竹やお寺の田んぼの藁を使い、手づくりの門松をしつらえます。そして年が明けて二日、三日と一昨年から、車の交通安全祈願のご祈祷や、ご家族の家の安全、諸願成就のご祈祷を致します。

今年は六家族の家の安全、平安のご祈祷と、十五台ほどの車にご祈祷をしました。これを行うようになってからというものの、真光寺でご祈祷した車が事故を起こさないよう、文字通り祈るような気持ちで日々を過ごしています。またご祈祷をしたご家族が無事で平安であるようにいつも心に想います。大きなお寺でのご祈祷も良いですが、お互いの顔が浮かび、またご本尊のお顔も思うことのできる、小さなお寺でのご祈祷も良いものと思っています。

「この世にあるさまざまの力のうち、さいわいの力をもっとも勝っている（中略）仏道もまたこのさいわいの力によつてなる」

『仏教百話』

増谷文雄

著

ちくま文庫

増一阿含経

誰しも幸いを求めて生きています。特に現代社会は欲望の達成実現を何より幸いとして求め続けているように感じます。しかし残念ながら欲望の実現に際限はなく、また欲望に振り回され苦しむことも多いように感じます。

何を幸いとするかそれが問題です。お正月の祈祷をしていても思うのですが、小さな欲望の達成も大切なのですが、それ以上に大きな幸いを求める心が必要なのではないかと思ひます。祈

りと願いは人生の羅針盤です。正しい祈りと願いをもつことが、どんなにつらく苦しい状況でも乗り切っていける大きな支えとなり、さらに正しく有意義な生き方へとつながっていくのではないかと思います。

お釈迦様はさいわいの力こそ最も強い力があるといわれます。仏になるという道もこの力によるといわれるのです。欲望ではない仏のような人を目指して、正しい強い願いと祈りを大切にしていきたいものです。

真光寺の里山は木の伐採が進み、見違えるようにきれいになってきました。たとえば田圃の回りの籾は、その木が伐採されることによつて、稲の病気を防いだり、害獣が天敵に食べられる空間を確保したりすることが出来ます。これまで「あおばずく」という渡り鳥のふくろうは確認していましたが、今冬絶滅したと思われる「ふくろう」も確認することができました。きれいに刈られた籾はふくろうの絶好の餌場となります。木を切る山の保全はとても重要なことなのです。いよいよ春を迎えまた田んぼ作業が始まります。収穫の秋を目指して頑張っていきます。

合掌

住職 岡本和幸



あおばずく

※写真はイメージです

行事報告

「檀信徒」

◇修正会大般若祈祷・年頭法要

般若心経をお唱えし、社会の平和・国土の安全・檀信徒の皆様の家内安全を祈る修正会大般若祈祷・年頭法要が行われました。大きな平和に近付くためには小さな平和を一つ一つ築いていかなければなりません。皆さまの日々の暮らしが平和でありますようにご祈祷いたしました。



ご本尊 薬師如来像



年頭法要



カラーゲンはいごうまんさんによる漫談

「縁の会会員」

◇七日法要

午前は月例供養の法要と授戒式、午後は季節毎の行事を行いました。十二月の大掃除は冬空の下、外壁等々磨いていただき、気分も新たに新年を迎えることができました。二月の坐禅と写経では、写経を希望される方が多く、写経の人氣ぶりを覗えることができました。

・季節の行事

十二月 「懺悔会」大掃除

一月 「修正会大般若祈祷法要」年頭法要
二月 「涅槃会・節分」坐禅と写経



毎月の月例供養と授戒式の様子



掃除の後のお茶の時間



十二月 大掃除

二月 坐禅と写経



一月 僧侶も交えての中食



昼食（精進料理）

十二月のメニューは

- ・古代米入り乳粥
- ・さつま芋と人参のきんぴら
- ・おひたし
- ・たくあん

お米は真光寺が無農薬で育てているお米です。お野菜はお寺の近辺で檀家さんが育てているものがほとんどです。里山ならではの慈愛に満ちた精進料理となっております。

真光寺日記

「仏弟子となる」

昨年、秋の彼岸会にて得度式（僧侶となるための出家の儀式）を行いました。得度したのは真光寺職員でもある手島二郎師。僧名は手島涼仁です。長年東京の東長寺というお寺で職員として働いた後、真光寺に移り早一年が過ぎ去ろうとしています。そんな中で迎えた得度式。人生の中で僧侶となる道を選択した手島師の心境を綴ってもらいました。

◆◆◆◆◆

仏弟子となり、やさしい時間を生きる

「出家とは自らの家を出て、仏様の家に入るということです。世間の常識を捨てて、お釈迦様の決めた決まりを守り、その願いの実現を生きる術とするということなんです。僧侶になるとは、職業を選択することではありません。お釈迦様や歴代の祖師方の生き方を手本とし、お釈迦様のような人になりきるという生き方を選択することを、僧侶になるといいます。」

これは師匠である岡本住職が昨年九月二十六日の私の得度式において、最初に述べられた言葉です。私はこの言葉を胸に、これから仏弟子として、今を生きていきます。寺に生まれたわけではなく、特に仏教に興味があったわけでもなく、そして実家のお墓参りにもほとんど行かなかったことがない私が、何故、仏弟子になる決心をしたのか。この場を借りて私自身も振り返りたいと思います。

・・・・・・・・・・・・・・・・

二十代から三十代の私の興味は、旅でした。ヨーロッパを中心に、アメリカ、アジアと旅をしてきましたが、どういう訳かいつも墓地に行っていました。

ニューヨークでもハノイでも、そしてニースでも墓地去きました。基本的には予定を立てない旅でしたので、町をぶらぶら歩いて気が向いたところでお昼を食べたり、美術館に行ったり、ずっと川面を眺めたり、といった感じでしたが、いつも何故か墓地に行き当たったのです。墓地に入るとだいたい静かな落ち着いた空気をまとうことができました。

ヨーロッパの墓地には墓標として、大抵、故人の名前と生年、没年が刻まれています。ゆっくりとした時間が流れる墓地を、墓標を眺めながら歩いていると、誰一人として知った人がいないにも関わらず、亡くなった方々に対する真摯な追悼が自然と湧き上がってきました。いくつかの墓地を廻り経て、スウェーデンの首都ストックホルムの墓地を訪れた時に、ふと少年時代のことを思い出しました。私は長崎の出身で、小学一年生から原爆のことについて折に触れ学んできたにも関わらず、当時は被爆者に対する真摯な追悼を行うことができなかったのです。若かったということもあつたのでしようが、原爆の被害にあつた人に対する気持ちと、ストックホルムの墓地に眠る人に対する気持ちはどうして違うのか分かっていませんでした。墓地を出て、街中を歩き、宿に戻り、夕食を食べ、ベッドに入っても疑問は解けませんでした。翌日も散歩のついでに同じ墓地に行きました。そこには秋の陽射しに包まれた緑溢れる芝生の真ん中に、大きなクロスのオブジェが峻厳にそして死者を暖かく見守るように立っていたのです。それを見た時に、この空間が持っているやさしい時間が、死者と私を繋いでいることに気が付いたのです。長崎の少年時代にはこのやさしい時間がなかったのです。

旅から戻ると、東長寺での勤務が始まります。ストックホルムの墓地で気付いたことを反芻すると、すばらしい空間だけれども、本当にそこにやさしい時間が流れているのか少し不安になりました。参拝者にきちんと亡くなった人と向き合う時間を提供できているのだろうか、気持ちよくお参りしてもらっているのか、と。それは数年前から関わりはじめた真光寺でも同じことでした。

何かきっかけがあつた訳ではありません。ただ漠然と気が付いたことは、そのやさしい時間が流れて

いないと思った原因が、実は東長寺や真光寺の空間に問題があつた訳ではなく、私自身に問題があるのではないかと意識することです。私自身が、やさしい時間にセツトされていなかったからではないかと思ひ始めました。ちょうど少年時代のように。それはお客様に対しても、スタッフに対しても、寺に対して、仏教に対しても同じことが言えるのではないかと、気付き始めました。悶々としたそのような気持ちを抱えて仕事をしていく中で、徐々に僧侶になりたいと思うようになっていきました。僧侶になつたからと言って、私がストックホルムの墓地で感じたことを皆さまに与えられるとは思っていません。ただ少なくとも、自覚はするだろうとは思っています。

自身の中では僧侶になるという決心は、ある程度固まりました。ただし問題は私だけのことに納まりません。家族、職場など気にかかることがたくさんありました（得度後の今でもあります）。しかし人生一度きり、四十にして惑わずとはいふものの、十年遅れて四十にして立つてもいいじゃないかと勝手に決め、岡本住職に相談いたしました。思うところはあつたでしょうが、私の師匠になつていただくことを快く引き受けてくれたのが、一年前の話です。

冒頭のように昨年九月、真光寺にて無事、得度式を厳修することができました。ただこれはスタートラインに立ったに過ぎないと自覚しています。これから私は仏弟子として、やさしい時間を生きていくように努力いたします。それが少しでも皆さまがやさしい時間の中で、亡くなった人と向き合うことができるようにお役に立てればと思っています。



歴代の諸師匠（左）が、お釈迦さま、三十三世の諸師匠に報告を申し上げ、ご加護を願います。右が手島師。

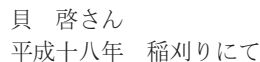


世間の虚飾をさけ、心身を清め、より一層仏道に励む意を表す。剃髪（ていはつ）。仏道修行者として世間の虚飾をさけ、心身を清め、より一層仏道に励む意を表す。

貝かい
啓ひらく

参加したのは男女併せて五名。昼食をいただいた後、本堂で坐禅、経行、坐禅、法話、坐禅、夕食後再び坐るといふ正に坐禅三昧のスケジュールでした。でもそれからが楽しかった。一升瓶を空けながらのご住職の炉辺談話です。佛教に関心を持ち始め佛教とは難解なものと苦戦していた私のどんな愚問にも解りやすく答えて下さったばかりでなく、話題は人間の生死全般に及び、豊富で含蓄のあるお話は実に面白かった。そして真光寺に入山された時のお話。無住で廃棄寸前の尼寺は到底人の住める状態になく、ご夫妻は自ら土工、大工、ペンキ屋さんとなり、兎に角住める状態に漕ぎつけた由。「お陰でこんな手になってしまひました」と見せられた両手の瘤がご苦勞の全てを物語

四季折々の里山の風景とそこに集まる心優しき寺友達の様子を習いたての俳句に詠んでみました。



驚や畦に並びてとる昼餉な
若きらと横一線の田植かな
放棄田は甍りけり青田波取
黙々と先行く老いの田草取
冷酒や一夜泊りの坐禅会
手花火で闇に手習いする子かな
もつれつつ闇に紛れし恋螢

忌の宴の果てたる書院盆の月
精米機喋りつづけて豊の秋
稲架を背に記念撮影收穫祭
方丈と鳥露圍みゐる夜長かな
白粥と薄き沢庵寺の朝
餅搗くや懺悔すれども消へぬ罪

合掌

上総自然学校（里山再生活動）

◇受賞しました！

「身近なことを大切に、地域、あい、から育てる景観づくり」というキャッチフレーズのもと、景観まちづくりを広げていくために袖ヶ浦市が企画した『第一回景観まちづくり賞』の授賞式と景観セミナーが開催されました。まちづくり賞のなかでも

「まなび賞」「つくり賞」「まもり賞」「はぐくみ賞」他奨励賞と、市内で活動している七つの市民団体が受賞しました。上総自然学校はそのうちの「保全部門・まもり賞」を受賞する運びとなり、表彰式にて出口袖ヶ浦市長から表彰状をいただいたて参りました。

上総自然学校活動地は、土取り場、残土埋立場、ゴルフ場、サーキット場に周囲を囲まれるなか、かろうじて昔ながらの里山の風景を維持しています。活動地周辺には耕作放棄され、人の手が入らなくなり荒れていく谷津田（山の谷間に連なる水田）がまだ何本か残っています。このまま放棄が進めば、残土処理場や土取り場となり荒涼とした風景が広がることも想像に難くありません。もちろん、こういった土取りのような自然破壊を百パーセント無くすことはできませんし、実際に私達もなんらかの形で自然破壊の上に成り立つ便利さ・快適さを享受しています。ですが、私達が今日こうして生活を営

むことのできる土台を築いてきた人々（自然と寄り添いながら、自然の循環と共に生きていた人々）の知恵や文化、歴史は失われてはならないものですし、それらはこうした自然破壊の進む現在だからこそ意味を持つものだと確信しています。

風景の広がる背景には人間がどのように生きてきたかの歴史が刻まれます。日本の原風景ともいわれる里山の風景には、人間が自然と共生しながら長年に渡り生きてきた知恵や文化が刻まれています。里山の再生と保全活動を続けていくなかで、多くの人に里山のもつ魅力を伝えると同時に里山を保全することの意味も伝えていく必要があるのではないかと、今回の受賞で改めて実感しました。

上総自然学校の活動は多くの方のご理解と協力のもとに成り立っています。また、ここ川原井まで足を運んでくださるイベントの参加者の皆さんがいることも活動の大きな支えとなつていきます。ここで皆さまにお礼を申し上げます。ありがとうございます。そして今後とも上総自然学校の応援をよろしく願います！

（張）



上総自然学校フィールド 里山と谷津田の風景



イベント集合写真



土取り場



残土埋立場

◇市進学院 キッズフィールド

今冬は学習塾市進学院さんの親子体験学習「キッズフィールド」の十二月プログラム「餅つき大会としめ縄作り体験」が上総自然学校にて行われました。五月の田植えに始まり、七月・草取り&生物観察、九月・稲刈りと多くの親子がお米作りに参加してくれました。そして一年の締めくくりになる十二月は、上総自然学校の谷津田で育った餅米でお餅つきと、稲わらでお正月のお飾りを作りました。お飾り作りを教えて下さったのは地元で酪農を営む傍らお米とお野菜も作っているベテラン農家の檀家さん。稲藁を撚って藁ロープを作るところから丁寧に教えていただきました。日本の文化、また里の暮らしの文化でもあるお餅つきと藁細工。小さな子供達のなかに貴重な体験として残ってもらえることを願いました。（もちろん親御さんたちにとっても初めての経験でした！）



藁ロープとお飾りとお餅



父ちゃん
ガンバッテ!!



お米がどんどん
くっついていくよ!!



これがもち米かあ!!



撚れてる!?

できたっ!!



...



おいら職人



上総自然学校イベント予定

◇谷津田のお米作り

『開墾&植樹』

・三月十二日(土)

『畦塗り』 田の畦を鍬で塗りつけます。

・四月十六日(土)／十七日(日)

『ヨモギ餅づくり』★

・四月二十三日(土)

『田植え』

・五月二十一日(土)／五月二十二日(日)

『補植&ゲンジボタル』★

・五月二十八日(土)

『ハイケボタルナイトウォーク』★

・六月十八日(土)

『草取り&ハイケボタル①』一泊二日

・六月二十五日(土)／二十六日(日)

『草取り&ハイケボタル②』一泊二日

・七月十六日(土)／十七日(日)

〈参加費〉 大人二千円

小学生千円(保険代込)

★は参加費五百円(保険代込)

◇袖ヶ浦の宝物発見隊! (自然観察会)

『春 里山自然観察会』

・四月二十九日(祝金)

『初夏 里山自然観察会』

・六月四日(土)

『夏 里山自然観察会』

・七月三十日(土)

〈参加費〉 五百円(保険代込)

※ご参加頂くにはお申込みが必要です。詳しくはhpをご覧ください。か、お電話でお申し込みください。
※内容は変更する場合がございますので事前にお問い合わせてください。

修証義に学ぶ

住職 岡本和幸

発心する

「修証義に学ぶ」というテーマで、曹洞宗の代表的な経典である『修証義』の要旨を引きながら、現代の私たちの生活にその教えを活かしていくためのお話を進めていきます。今回は、第二章「懺悔滅罪」についてお話をしたいと思います。

懺悔とはなにか

懺悔というと思ひ出すのですが、昔、「オレたちひょうきん族」という人気テレビ番組がありました。この中の一つのコーナーに、牧師さん役のディレクターが、出演者であるタレントにその日の番組での失敗を言わせ、十字架にかかっているキリストに扮したお笑いタレントがバツを出す上から水が降ってきて、マルを出すことがあり舞うという演出があり、大変はやったことがありました。それから日本でも懺悔ということがポピュラーになったような気がします。おそらくそれ以前の日本では、戦後の「一億総懺悔」というような言葉などで聞いたことはあっても、イメージとして実感することは少なかったのではないかと思います。何かいやな印象があることも事実です。しかしキリスト教では懺悔を重視し信者の懺悔を聞くことは神父・牧師の主要な仕事でもあるようです。

懺悔と漢字で書いたのではわかりませんが、キリスト教では「ざんげ」と読み、仏教用語では「さんげ」と読みます。懺という字はサンスクリット語の「クサマ」の音写で、悔は同じく「クサマ」の意訳ですから、いずれも悔いることを意味しています。今日でもインドでは「ごめんなさい」という場合に、「クサムヤタム」というそうです。そのインドで、お釈迦様が存命中の原始仏教の時代に、比丘が半月毎に集まり、戒律を読み上げながら、それに違反した者が自ら申し出る、ウポーサタ（布薩・ふさつ）という儀式が行われていたといえます。

インド洋に浮かぶスリランカという国には、もっとも原始的な仏教が残っているといわれています。この国を旅行したときに、満月の日に出くわしました。スリランカでは、満月と新月の日は仏教徒の休日となり、飲酒を禁止しています。この日はホテルでもお酒を販売していません。日本人の旅行は概して昼間から飲むビールが楽しみの一つですが、一般の店はともかく、ホテルでもビールを注文すると断られた思い出があります。ちなみにノンアルコールビールはいいようです。いならばキリスト教徒にとつての日曜日、イスラム教徒にとつての金曜日のように、旧暦の一日と十五日は仏教徒の安息日なのです。ただ人間の観念による区別を空であるところの仏教の教義から、この日は休日、この日は仕事と、厳格に区別しただわることはしないようです。この日は半月間の自らの行いを反省し、安らかにおだやかに過ごす日といえるでしょう。

日本の禅宗の修行道場でも、一日と十五日（曹洞宗では主として一日に行わず、月の最後の日に行う）には略布薩という行持が行われています。この行持は梵網經という戒律について書いてあるお経を読み、戒律についての老師の法話を聞き、

仏名を唱えながら何度も礼拝します。

仏教の懺悔観

さて、一般的には懺悔といえは神仏の前にかしづいて自らの罪を告白し、神仏の許しを乞うものだと考えます。しかし仏教は絶対者としての神をもたない宗教です。神父さんや牧師さんが使徒という立場、つまり神の使いであり、神の言葉を神に代わって伝える役目であるのに対して、僧侶は仏にあらがれ、仏を目指す修行者なのです。つまり僧侶は懺悔を聞く側ではなく、修行中の自らの行いを懺悔する側であるといえます。そして懺悔を聞くのは絶対者である神ではなく、世の中の変わることのない真理であり、さとりの方体としての仏なのです。ですから仏教の懺悔は許しを乞うというよりも、真実と照らして自らの行いを省みるという色彩が濃いことがわかります。

『修証義』第二証「懺悔滅罪」の冒頭に、「仏祖憐れみのあまり広大の慈門を開き置けり、是れ一切衆生を証入せしめんがためなり」とあります。つまり仏が説かれた真理は人々を救い、苦しみや迷いのない悟りへ導くための道筋だという宣言です。こうした言葉がはじめに置かれているのは、この章が単に神仏に許しを乞えということを説くような単純なものでないことを表しています。

アングリマラーラの懺悔

懺悔を考えるとときに、最も象徴的な物語があります。お釈迦様と、アングリマラーラのお話です。アングリマラーラの本名はアヒンサといい、コーサラ国の首都、サイバッティのバラモン大臣の子で、大変聡明で強壮な青年でした。彼は学生時代、インドの古典的宗教であるバラモン教を教える師

匠の所に下宿して、その基本的な経文であるベーダなどの学問を勉強していました。彼は多くの学生の中でも群を抜き、学ぶべきことはすべて学んでいたといえます。

ある日、師匠が所用で外出しました。師の妻は、聡明で美しい青年であるアヒンサに魅かれて、彼を誘惑しようとした。しかしまじめなアヒンサはけっして師妻には従わず、道ならぬ恋に陥ることはありませんでした。これを恨みに思った妻は師匠が帰ると、わざと衣服を乱し、アヒンサに乱暴されたと訴えました。師はこれを真に受けアヒンサに復讐をしようと考えましたが、年齢や体格の差があり打ち勝つ見込みはありません。そこで一計を案じ、アヒンサを呼んで言いました。「前は学ぶべきものはすべて学び終わったが、最後に仕上げが一つ残っている。早朝に城外の大道に出て、通行人を殺し、一人から一本ずつの指を切り、それを百本集めて首飾りを作りなさい。そうすればお前はすべての修行を修了することができるといいました。つまり百人もの人殺しをけしかけたのです。これにはアヒンサも悩みました。しかし従順な性格の彼は、師の命に逆らうことができず、また向学心に燃える心から、これを行ったのです。

次の日、早速早朝に城外の大道に出て、人を殺し指を集めはじめました。アングリマールとはアングリが指、マールが首飾りということで「指の首飾りを持った者」という意味があります。この彼の行為はコーサラ国首都の人々を震えあがらせ、殺人鬼アングリマールと呼んで恐れたのです。

町に托鉢^{たたく}に出ているお釈迦様に告げ、町には出ないと祇園精舎^{ぎおんしやうじや}にいますお釈迦様に告げ、町には出ないようにといいました。しかしこのことを聞いたお釈迦様は、单身早朝の城外に赴きました。ちょうどその頃アヒンサの母は弁当を作り、アヒン

サを探しに城外へやって来ました。アヒンサは九十九人の指を繋げ、最後の一人を探していました。すでに異常な精神状態になっていたアヒンサは、ちやうどやってきた自分の母親に躊躇なく斬りかかりました。そこへお釈迦様が通りかかり、アヒンサの母の前に進み出ると、アヒンサは刃の矛先を母からお釈迦様に変えて切りかろうとしましたが、なぜか体がすくんでどうすることもできません。ゆつくりと歩みを進めるお釈迦様に、アヒンサは「沙門よ止まれ」と叫ぶと、お釈迦様は「私は止まっている。アングリマールよ、お前こそ止まれ」といわれました。「なにゆえおんみは、自分が歩いているのに止まっているといい、私が止まっているのに止まれといわれるのか」と問いました。お釈迦様は「自分は一切の生類に対して害する心を持っていないから止まっているのであり、お前は生類に対して自制心がないから止まっていけないのだ」といわれたのでした。これによって彼は心の眼を開き、「私が悪かった、間違ったことをしてしまった、どうぞ私を弟子にしてください」と出家を願いました。お釈迦様はこれを許し、祇園精舎に連れ帰られたのでした。

このころコーサラ国王のパセーナデーは凶賊のことを聞き、軍を率いて討伐に出ましたが、賊はすでに出家してお釈迦様の弟子となり祇園精舎に行くと聞き、祇園精舎に行きました。そしてお釈迦様に「御仏よ、アングリマールという殺人鬼を捕えるために来ました」といいました。するとお釈迦様は「すでにアングリマールという殺人鬼はいない。その殺人鬼は出家して比丘となつてここにいます」と答えました。王は「御仏はどんなことでもなしとげる。大悲をたれて人民を安らかに守ってください」といつて引き上げていきました。この後、出家し比丘となったアヒンサが食物を得るために托鉢していると、家族を殺された人々が

石や棒を投げつけたり乱暴をしたりしました。そのため彼らの衣は破れ、体は傷つきました。これを見たお釈迦様は、アヒンサにいいました。「過去に起こした自らの行いの結果を、あなたはすべて受けなければならぬ。しかし今あなたは出家した比丘なのだから、けっして怒りの心を起こしてはいけません」。お釈迦様は彼の深い罪を早く清算するために、すべてを忍受すべきことを説かれ、彼はさまざまな迫害をすべて甘んじて受け、「雲から姿を現した月の如く、この世を照らすことができた」といわれる大阿羅漢となったそうです。

一説にはアヒンサは大臣の息子でも学者の弟子でもなく、凶悪犯だったともいわれます。このお話の中で、お釈迦様がアヒンサを説得する場面がありますが、九十九人もの人を殺した異常な精神状態の人間を説得するのは大変なことであつたと思います。おそらくこれを説得するのに、『修証義』の第一章に説かれているように、世の中の道理を説き、人生の苦を説き、因果を含め、よき行いを積み重ねることに人生を開拓していく秘訣があり、人殺しという悪しき縁を積み重ねたのであればどこまで行っても悪しき人生しかおくれないうことを言い含めていったことが想像されます。そしてアングリマールは仏の前で懺悔をしました。つまり悔い改めたのです。しかしそれは神に許されるといった類のものではありません。おそらく彼に殺された九十九人の人々の家族は、一生彼を許すことはなかったと思います。世間も同じように彼を許さず、悪口、暴言を投げかけ続けたと思います。アヒンサは常に命の危険にさらされていたことでしょう。過去を変えることは誰にもできません。過去の自らの行いを背負って生きていくのです。しかし、お釈迦様の前でこんなことをしてはいけないうと悔い、こころの底から反省し、これからは比丘として、お釈迦様の教えによって心安ら

かに、そして人のためになるよい行いを積み重ねていこうと決意をしたアヒンサの心は穏やかになつていたに違いありません。周りの状況がどうであれ、彼は仏前に懺悔した時から、過去の自分とは違う心を持ったのです。

発心する

仏教の懺悔は発心という意味を持っています。発菩提心ともいうこの心は、自らの行いを普通の真理に照らし、よりよい縁を作ることと自分の人生を素晴らしいものにしていこうと決意する心です。『修証義』第二章に、私のとても好きな言葉があります。「仏祖の往昔は我等なり、我等が当来は仏祖ならん」という言葉です。かつてのお釈迦様や有名な祖師方も人生に悩み、罪を犯し、苦しみや迷いの心にさいなまれた人生を送っていたのです。しかしそのような人生を懺悔し、発心してその迷いの心のままに、修行努力してさとれる者、仏祖となったのです。私たちが現在迷いや苦しみの中にいることに気づけば、すでに過去の仏祖と同じ状況にあるということになるのです。真理に照らして自らの行いを考えてみましょう。これではいけないという懺悔の気づきを持ちましょう。その心を持つことが幸せな人生を送っていく第一歩なのですよ、お釈迦様からの呼びかけがこの言葉の中に込められているように思えてなりません。



袖ヶ浦散歩

真光寺から車で十五分ほど走らせたところにある花の名所「袖ヶ浦公園」と、農畜産物直売所「ゆりの里」をご紹介します。真光寺にお参りの際にお寄り頂ければと思います。

「袖ヶ浦公園」

広い園内（約二十五万平方メートル）には梅・桜・菖蒲など四季折々の花が植えられ、目を楽しませてくれます。また大小二つの池と、園をぐるりと取り囲む遊歩道、全長四百五十メートル・二十七ポイントのアスレチックもあり、ちよつとした散策や運動も楽しめます。

およそ三千六百平方メートルもある菖蒲園にはなんと五十種一万五千株の菖蒲が植えられ、花の咲く時期には多くの観光客で賑わいます。又、標高三十メートルの展望台からは袖ヶ浦市の田園風景と東京湾が一望でき、一休みするには最適の場所となっています。

他にも郷土博物館などの施設が併設しており、袖ヶ浦市の歴史や文化も楽しめます。

併設施設

〈郷土博物館〉

現在から時間を遡って二万五千年にも及ぶ袖ヶ浦の歴史を紹介しています。

〈万葉の里〉

万葉集に詠まれた約百六十種の植物のうち、百五種を観察できます。

〈旧進藤家住宅〉

江戸末期の代官を務めた進藤家の住宅。上層農家の生活様式を現代に伝える貴重な建造物。



梅園



展望台からの眺め



桜と菜の花※



菖蒲園※

※袖ヶ浦公園のHPから許可を得て使用しています



1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
		パンジー				スイレン					
		梅				ユリ					
			菜の花			花菖蒲					
			水仙			紫陽花					
				桜		サルビア					
葉ボタン			マリーゴールド				日々草				葉ボタン

行事予定

「檀信徒」

◇花祭り法要・檀信徒総会

平成二十三年四月十日（日）午前十一時より

台所当番 新田

お釈迦様の降誕を祝い、法要後は檀信徒総会を開催いたします。また総会終了後に親睦会を開催いたします。川原井地区の檀信徒の皆様は送迎いたします。役員が出欠を取りましますのでお申込み下さい。川原井地区以外の方はお電話等にてお申し込みください。

◇山門大施食会法要

平成二十三年八月九日（火）午後二時より

右記の日程で大施食会法要を行います。なお卒塔婆のお申込みは地区役員もしくは、お寺へ電話かFAXで連絡くださいますようお願い致します。

◇婦人会ご詠歌練習日

四月十二日・二十六日 五月十日・十七日

六月十四日・二十八日 七月五日・十九日

八月 二日（いずれも火曜日）

場所 真光寺（どなたでも予約なしで参加できます）
時間 各回 七時半より（五月以降は八時より）

◇お寺掃除

六月二十六日（日）表場上／下

七月三十一日（日）根澄山／台／新田

「ゆりの里」

房総半島の恵みを取り揃えた店内には、地元地区の新鮮野菜をメインに千葉県産、他県の農畜産物も取り扱っています。又、袖ヶ浦市は酪農や養鶏も盛んで、みずき会という酪農婦人部の方々の手作りジエラートや、牛乳洋かん、チーズケーキなど牛乳を使った加工品も豊富です。卵の販売コーナーにはこだわりの地元産の卵が常時四〜六種類も取り揃えてあります。他にも「ちばエコ農産物」野菜（化学合成農薬・化学肥料ともに通常の半分以下で栽培）やお米の量り売、米粉パンや米粉クレープなどなど房総半島の恵みが一堂に並び、目移りすること間違いなしです。



南米の地鶏アローカナから受け継いだという若草色の卵（左）と純国産鶏もみじ（右）。どちらも吟味された安全飼料を餌に太陽のもとでのびのび育った鶏の卵です。



手作りのジャム各種。リンゴやイチジク、クリ、ブルーベリー、ユズなどなど。季節のジャムが並びます。



地元地区の手作り酵母パン。黒豆やヨモギ、オリーブ、ドライトマトなど種類もたくさん。

旬の新鮮野菜と果物。旬のものはとにかくたくさん並びます。そして安い。下は菜の花。果物ははっさくとかゆずときんかん。（1月撮影）



袖ヶ浦公園

最寄駅：JR袖ヶ浦から路線バス10分（日東交通）
TEL：0438-63-6560
営業時間：8:30～17:00
定休日：無休
駐車場：800台（無料）

ゆりの里

所在地：袖ヶ浦市飯富1635-1（袖ヶ浦公園前）
TEL：0438-60-2550
営業時間：9:30～18:00
定休日：毎月第2水曜（8月は除く）年末年始は休業
駐車場：普通車69台、大型車3台（無料）

行事予定

「縁の会会員」

◇七日法要（七日前後に開催）

縁の会七日法要では月命日の方のご供養と、授戒式を行っています。
また季節毎の行事も併せて行っておりますので、お参りのみならず、
里山の禅寺ならではのひとときを過ごしにお気軽にご参加ください。

〈七日法要 日程〉

午前 十一時〜 授戒式・月例供養
正午 十二時〜 中食（精進料理）
午後 一時〜 季節の行事

〈季節の行事〉

四月九日（土）「植樹祭」 樹木葬墓苑に植樹をして森を育てます
五月七日（土）「田植え祭」 自然豊かな里山を散策します
六月七日（火）「中元祭」 坐禅。静寂な時間をお楽しみください
七月七日（木）「大施食会法要」 大施食会法要
八月七日（日）「お盆法要」 大施食会法要

大施食会法要

七月、八月の七日法要午後の部は縁の会大施食会法要を行います。午
後からの参加のみでも結構です。お弁当をご用意致しますので、ご家
族でご参加ください。特に新盆の方、先祖の盆供養をご希望の方はご
利用ください。詳しくは直近に各家にご案内致します。

※生花をお供えする代わりに、花塔婆を上げてください。前もって電話か
「FAXで」依頼されれば、お墓参りの際にお渡しできます。

*昼食準備の都合上、ご出席いただく場合は必ずお電話等でご予約下さい。
午前のみ・午後のみ のご参加もできます。

*電車・バスでの参加の方には送迎を致します。お電話等でご予約下さい。

～季節の行事～

〈送迎時間〉

□ 電車の方
□ バスの方

【土日祝】

【平日】

□ お車の方

JR内房線「袖ヶ浦」駅 10時11分着

品川発 9時35分↓袖ヶ浦BT 10時22分着
横浜発 9時40分↓袖ヶ浦BT 10時22分着
川崎発 9時25分↓袖ヶ浦BT 10時14分着
品川発 9時25分↓袖ヶ浦BT 10時12分着
横浜発 9時30分↓袖ヶ浦BT 10時12分着
川崎発 9時15分↓袖ヶ浦BT 10時04分着

10時40分頃までにお越しください。



五月 里山散策



四月 植樹祭



七、八月 大施食会法



六月 坐禅

※写真は昨年の行事の様子です

各種お申込み連絡先

□TEL 0438-75-7414 (代表) / 0438-75-7365 (縁の会事務局) □FAX 0438-75-7630
□e-mail ennokai@shinko-ji.jp (縁の会) / satoyama@shinko-ji.jp (上総自然学校)